巻頭特集

芸濃い劇団 燦（さん）

芸濃町を芸濃（げいこ）い町へ 市民が支える劇団の挑戦

日本で唯一「げいのう」の名を持つ町、芸濃町。

２００６年の市町村合併により、行政区画は津市となりましたが、地名や歴史、地域を愛する人々の心意気は、今に息づいています。

それを体現しているのが、２０１８年に設立された「芸濃い劇団 燦」。その軌跡をたどります。

シアターＲＡＫＵ公演「歌舞伎・十二夜」の前座出演から

「げいのう」の名を生かし 芸能文化による地域づくり

劇団の母体となったのが、２０１５年設立の「芸濃町を芸濃い町にする会」。芸濃町椋本出身で東京在住の文筆家・伊藤裕作さんが、日本で唯一の「げいのう」の名前を生かした地域づくりを掲げ、地元の仲間と共に立ち上げました。伊藤さんのネットワークを生かし、東京から、演出家で日本演出者協会理事長の流山児祥さんが代表を務める「流山児☆事務所」や、役者自身が巨大な仮設小屋を建て、劇場内で大掛かりな演出を行う「水族館劇場」などの公演を誘致。上質な舞台に多くの観客が魅了され、演劇への関心が高まります。

文化センター元館長
稲垣巧さん

２０１８年４月には津市芸濃総合文化センターで、流山児さんが主宰する「シアターＲＡＫＵ」の公演「歌舞伎・十二夜」を上演。この舞台の導入劇の出演者として、芸濃町に在住や在勤、在学の16人が集まり、流山児さんが指導する演劇ワークショップに参加。本番では堂々とした演技を披露しました。その出演者の１人が同会事務局長で、会場の文化センター館長でもあった稲垣巧さん。「演技は全くの素人でしたが、以前にも水族館劇場の公演に出演する機会をいただきました。さらに演劇ワークショップにも参加して舞台に立つ経験ができ、演じる楽しさに、すっかり引き込まれてしまいました」と笑います。

観客の反応も上々だったことから、「芸濃町を芸能文化に理解の深い、関心の高い町に」という同会主旨の実現に向け、「芸濃い劇団 燦」の設立が決まり、稲垣さんが代表に。同じく導入劇に出演した大人６人、中学生４人、小学生１人と、協力者４人が発足メンバーとなりました。「さまざまな役を演じる経験は、子どもたちにとっても想像力を高め、視野を広げる貴重な機会となります」。稲垣さんは、それを間近で実感したそうです。

台本の読み合わせから熱がこもります

演劇の魅力に引かれた仲間 力を集め第１回公演に至る

劇団設立後は、芸濃町の伝説を盛り込んだ水族館劇場の「この世（よ）のような夢」をアレンジしての公演が当面の目標となり、稲垣さんが脚本を担当。本格的な演劇活動のため、団員たちが友人知人や職場の仲間などに声を掛け、一般募集も行い、広く団員を募りました。地域おこしの主旨を反映し、文化センターが劇団の活動拠点として、練習や公演の場となります。演技指導には、流山児さんやその劇団スタッフの団員の赤塚聰さんは「『歌舞伎・十二夜』の公演を鑑賞しましたが、地域の皆さんの演技が素晴らしくて。自分にもできるだろうかと考え、思い切って参加しました」。同じく団員の小林小夜子さんは「私も公演を鑑賞して、知人の活躍に感動して参加しました。劇団を通して普段の生活とは違った、多くの皆さんと出会えて、一緒に活動できるのも魅力ですね」と話します。

２０１９年８月、第１回公演「この世のような夢　芸濃編」と題し、第１部「雨乞い伝説序章～龍の鱗」と第２部「偉人遺産と乱歩の妄想～龍は今」を上演。役者から裏方まで、団員やボランティアが担当。その熱演に、観客から惜しみない拍手が送られました。

第１部は芸濃町の長徳寺に伝わる話や、横山池の造成にまつわる話などが題材。第２部は三重県出身の作家・江戸川乱歩の作品「パノラマ島奇譚（きたん）」が、巨大な摩崖仏が並ぶ石山観音、大金を投じて横山池を造成した駒越五郎八、伊勢茶の輸出で財を成した駒田作五郎をモデルにしたのではという、伊藤さんの推論を基にした作品。稲垣さんは「庶民演劇の始まりである『田楽』『猿楽』のように、演劇を生活の一部として皆で楽しむことが目標。芸濃町に関わる伝説や歴史、偉人などの題材にした創作劇で、町の皆さんに親しんでいただければ」と話します。

舞台「この世のような夢　芸濃編」練習と本番風景から。水戸黄門に扮したご意見番が登場したり、大人と子どもがダンスを披露したり、ユニークな演出が観客を沸かせました

「庶民演劇の始まりである『田楽』『猿楽』のように、
演劇を生活の一部として皆で楽しむことが目標。

舞台「於奈津の方」練習風景。多くの人々の協力で、華やかな衣装を調達

町の人々の温かさに満ちた 観客も演者も楽しめる舞台

以来、福祉施設で慰問公演を行い、地域の文化祭にも参加。２０２０年12月には第２回公演「於奈津（おなつ）の方」を上演。題材は芸濃町出身で徳川家に仕え、家康の側室となった女性、於奈津の方の生涯。残念ながらコロナ禍の影響により、一部関係者のみの鑑賞となりましたが、於奈津が二条城で家康の窮地を救った逸話や、関ケ原の徳川陣営にオレオレ詐欺の電話がかかるなどユーモラスなシーンもあり、会場は笑いに包まれました。小林さんは「週に１回の練習が楽しく、役になり切るよう心掛けています。本番で舞台に立ち、客席の皆さんの反応をじかに感じながら演じるのは、何ものにも代えがたい経験です」と目を輝かせます。赤塚さんは「練習を重ねて大きな声が出せるようになりました。舞台で拍手をいただいたり、町で声を掛けられたりすると、やはりうれしいですし、励みになりますね」とほほえみます。

現在、団員は７歳から79歳まで約60人。練習や公演に必要な費用は、まずは団員の会費で賄っていますが、他にも多くの人々がサポートしています。稲垣さんは「公演となれば小道具から舞台装置まで必要で、衣装の準備、着付けや化粧の手配もあります。公演の告知もします。そういったことに多方面からご協力をいただきます。公演の鑑賞は無料ですが、観客の皆さんから心のこもった寄付もいただき、感謝の念に堪えません。私は芸濃町外の出身なので、ことさらこの町の温かさが身に染みますね。まさに市民による、市民に支えられる劇団です」と思いを語ります。

今年はコロナ禍の収束を祈りつつ、夏までに「於奈津の方」の一般公演や、新しい演目「平維盛」の練習と上演の準備も進めています。団員は随時募集中。「ぜひ一度芸濃町を訪れ、町の温かさに触れてみてください」。稲垣さんがいざないます。

裏方ではメイクや大道具、広報、受付など、団員ほか多くのボランティアに支えられています

文／山口美咲　写真提供／芸濃い劇団 燦　デザイン／chica